
サンヨウと私とバレンタイン

咲亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンヨウと私とバレンタイン

【Nコード】

N6532V

【作者名】

咲亜

【あらすじ】

サンヨウとオリキャラのチョコ話。というか季節外れのバレンタイン話。

(作者のスランプ防止短編)

(前書き)

オリキャラ

リエン 12歳

・カントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ、イッシュのチャンピオンを倒したポケモントレーナー。
・カントーのクチバ出身、今はカナワタウンに住んでいる。
・バトルサブウェイで駅員兼ねサブウェイマスター代理をしている、ある意味凄腕。

・ちなみに職を探し、ポケモンソムリエBクラスを取った事も。

・性格は冷静沈着に見えるが、本当は血の気が多く、すぐ怒りかなり怖い。

・サンヨウジムの三つ子とは、ジム戦の時から付き合っている。(ざつと半年)

・サンヨウジムの紅茶はイッシューと信じている。

・男の子に成り済ましている。(むしろ女を捨てた)

・でも実はデントが好き。

・コーンとクダリに好かれている。ポッドとは仲の良い友達(?)。

デントとはまあ普通の関係。

これを読んで危険だと感じたらBack!

では、本文をどうぞ!!

バレンタインデー。

それは2月14日、チョコ争奪戦という争いが繰り広げられる日である。

・・・一体そんなの誰が言ったんだ。

「マスターノボリ、これ、受け取って下さい」

バトルサブウェイ。その中にある、サブウェイマスター専用の休憩室に顔を見せたのは、今日はオフである筈のリエンだった。

ノボリに差し出したのは、かわいらしくラッピングされたピンクの袋。

傍で見ていたクダリも、「何々？」と寄って来た。

「ああー、今日はバレンタインだね！ねえねえリエン、ボクの方もある？」

「ありますよ」

紙袋から同じ袋を取り出し、クダリに渡す。

「中はガトーショコラです。マスターノボリは甘さ控えめにしましたから、ご安心を」

「これは、わざわざわたくしの為にそのような事を。ありがとうございます、リエン」

「それと、このチョコ、駅員の皆さんに渡しておいてくれませんか？」

と、大量のチョコが入った紙袋をノボリに押し付ける。

ノボリは「分かりました」と呟き、紙袋を受け取った。

「あれリエン、そのチョコは？」

「ああこれですか。サンヨウジムのお三方に渡しに行くんですよ」
「……………へえ、そう」

あれ、反応が薄い。と首を傾げるリエンだが、あまり気にせずくると背を向ける。

「あ、サブウェイマスター代理のあのコート、借りてもいいでしょうか？今日は思ったよりも寒くて」

「…………冬に長袖のシャツだけで外に出ないで下さいまし」
「了解しました。遠慮なく借ります」

壁際にあるアルミ製のロッカー、鍵を差し込み、建て付けの悪い扉を開ける。

中に入っているグレーのコートを肩にかけた。

「では、失礼しました」

「おはようポッド。今日は何の日か覚えてるかい？」

「？ああ。バレンタインだろ」

サンヨウジムの朝。何時ものように着替えたデントがポッドにいきなり聞いてきた。

「そうですね、コーン達の数少ないオフの日でもあります。で、バレンタインがどうかしましたか？」

ちなみに、バレンタインの日にはカップルで過ごす事が多く、ジムの挑戦も、カフェの客も少ないのだ。

それがバレンタインにサンヨウジムがオフである理由だ。

「そうバレンタイン！女子が男子にチョコをあげる、何とも神聖で素晴らしい日なんだ！

っていう日なんだよポッド、コーン」

「・・・何だよ今の前フリ」

「さすがデントというべきでしょうか・・・」

「というよりはそんな事は正直どうでもいいんだ。さっきライブキヤスターでリエンが何て言ってたかわかるかい!？」

何か急にテンションが上がっているデントに呆れた視線を向けながら、ポッドとコーンは首を振った。

だが、何となく予想がついた二人である。何しろ今日はバレンタインなのだから。

「今から僕達にチョコを渡しに来るってさ!!」

「・・・予想がついていただけに、こんな反応しかできないコーンを許して下さい」

「で、で!?!?チョコって言ったのか!?!」

あの多少男勝りであるリエン。そのリエンが、バレンタインにチョコを渡しに来るとは俄かに信じがたいのだが、本当に来るのなら、これに越した事は無い。

ポッドにちらちらと人差し指を振り、にこやかに（かつハイテンションに）デントは言う。

「もちろん！しかもバッチリ三人分！ああ！僕は一年の中にバレンタインデーという日がある事に感謝する！！」

「・・・で、いつ来るんだ、リエン？」

「ああ、『そらをとぶ』で来るらしいからすぐだと思っよ」

とその時、

『すみませーん、誰かいますかー？』

「っ来た！」

言った瞬間、風のような早さでジムの扉に向かうコーン。

「って早っ！！アイツあんな速かったかよ足！！」

「ふふふ・・・人間本気をだせばこれくらいおてのものですよ」

「つまり、火事場の馬鹿力みたいなものだね」

我先にと扉を開けたコーン。

「ああ・・・ジムリーダーコーンしか居ないのですか？」

「僕達もちゃんと居るよ」

コートの後ろから、ひよっこりと顔を覗かせたデントとポッド。

リエンを中に入れ、彼女がコートを脱ぐのをじっと見る三人。

「……気色悪い。見ないでください」

「……っーかお前そのカツコ……」

いつもシャツにネクタイ、ジーン等ですませる彼女は、珍しくふわりとした白いワンピースを着ていた。

髪も二つに結び、照れたように頬を染めるリエんに、三人とも思った事は同じようで。

「……では本題に……。ハッピーバレンタインです。どうぞ、受け取ってください」

そう言っただけで差し出したのは、ノボリやクダリに渡した物と同じガトーショコラだった。

「おお！これ、リエンが作ったのかい？ありがとう、とってもおいしそうだ」

「あ、では紅茶でもいれて、皆で食べましょう」

「いえ、私はそんな……」

「遠慮しないでください。このコーン達が、イッシューの紅茶をリエンにいれてあげますよ」

「はあ、ではお言葉に甘えて……」

その後、ガトーショコラと紅茶を、四人で仲良くいただいたそうなの。

おわり

おまけ（会話のみ）

「ポッド、ガトリーシヨコラの形、何でしたか？」

「ん？形？ああ丸だったけど」

「コーンも丸なんですが・・・デントは・・・」

「・・・デントは？」

「ハート型ですよ、ハート型。何を意味するかぐらいポッドにも分かりますよね・・・」

「・・・まあな・・・」

『俺達は義理、デントは本命って事か・・・』
『・・・まったくです・・・』

(後書き)

何故スランプ防止短編を別ジャンル(銀魂以外)にしたのか、今更後悔。

ポケモンにはまってしまったからなのですが・・・。
そろそろ白夜又再臨編が更新できるかもです。

では！

(ちなみに、長編が一本完結したら、これで長編やるつかと思うのですが、ご意見を！)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6532v/>

サンヨウと私とバレンタイン

2011年10月7日17時57分発行